

中海岸養浜計画の概要

1. 養浜の考え方

2. 養浜諸元

2-1 目標浜幅

2-2 粒径

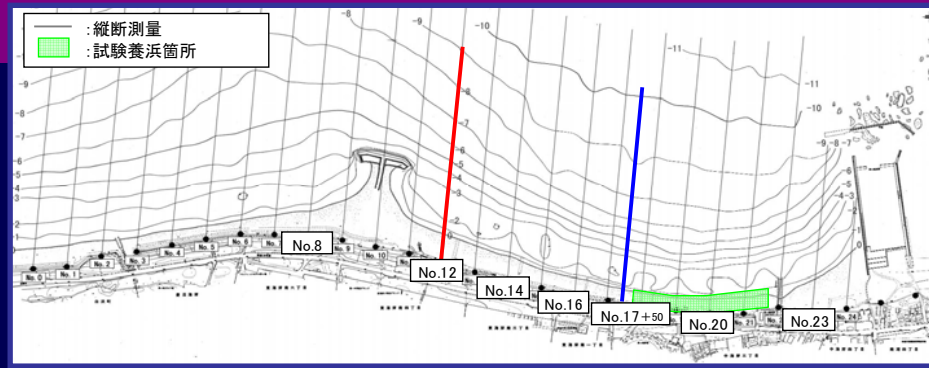
2-3 養浜方法と養浜形状

2-4 漂砂制御構造物の併用の可能性

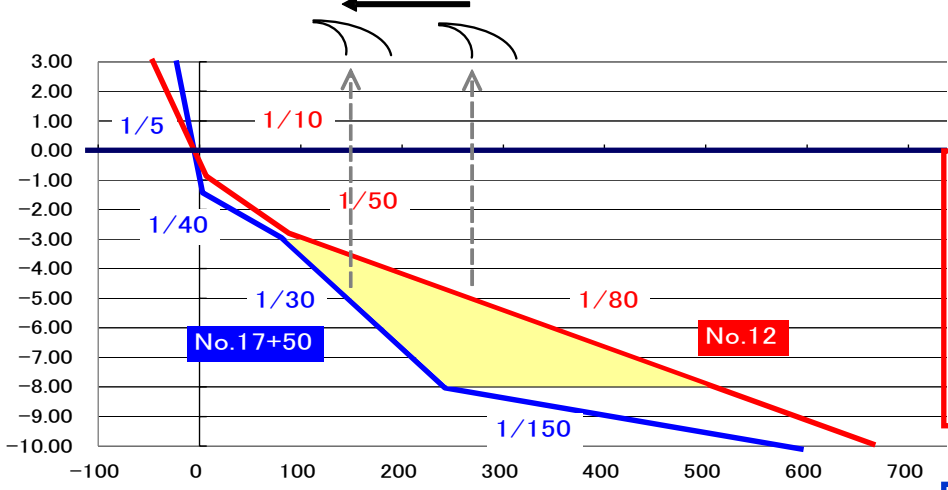
3. 養浜計画のまとめ

1. 養浜の考え方

粗粒土砂は茅ヶ崎漁港とヘッドランド間に留まることができる。しかし、沖合の海底面を覆っている細粒土砂はヘッドランドを越えて次第に東側へと流出するので、沖合の土砂量は次第に減少傾向となり、海底勾配は徐々に急になる。



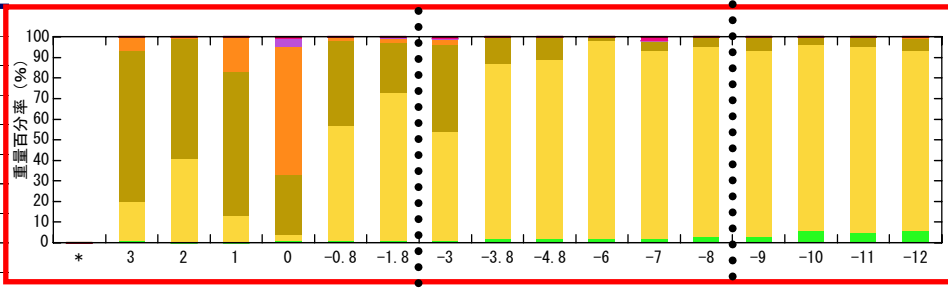
例えば水深5mで砕ける波が100m程度岸に近づく



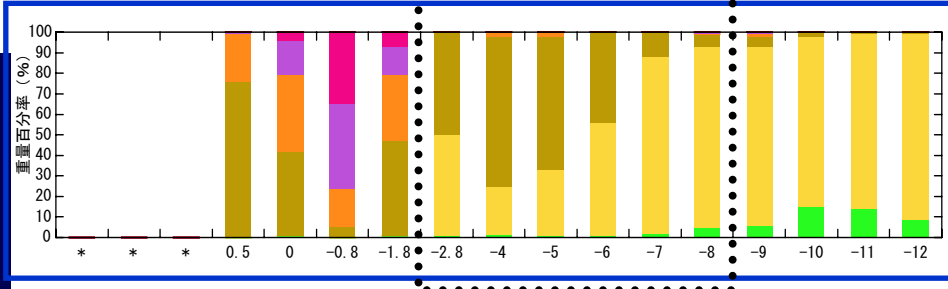
No.12とNo.17+50の断面比較

沖合いの細粒土砂の減少は、防護面だけでなく、漁業（しらす漁や地引網）やサーフィン※などの利用面・環境面にも影響を与える。
 （※細粒分の流出はバーの消失を招く。）

- 大礫 (64mm以上256mm未満)
- 粗砂 (0.425mm以上2mm未満)
- シルト (0.075mm未満)
- 中礫 (4mm以上64mm未満)
- 中砂 (0.250mm以上0.425mm未満)
- 細礫 (2mm以上4mm未満)
- 細砂 (0.075mm以上0.250mm未満)



2005年10月25日 (No. 11) 投入前



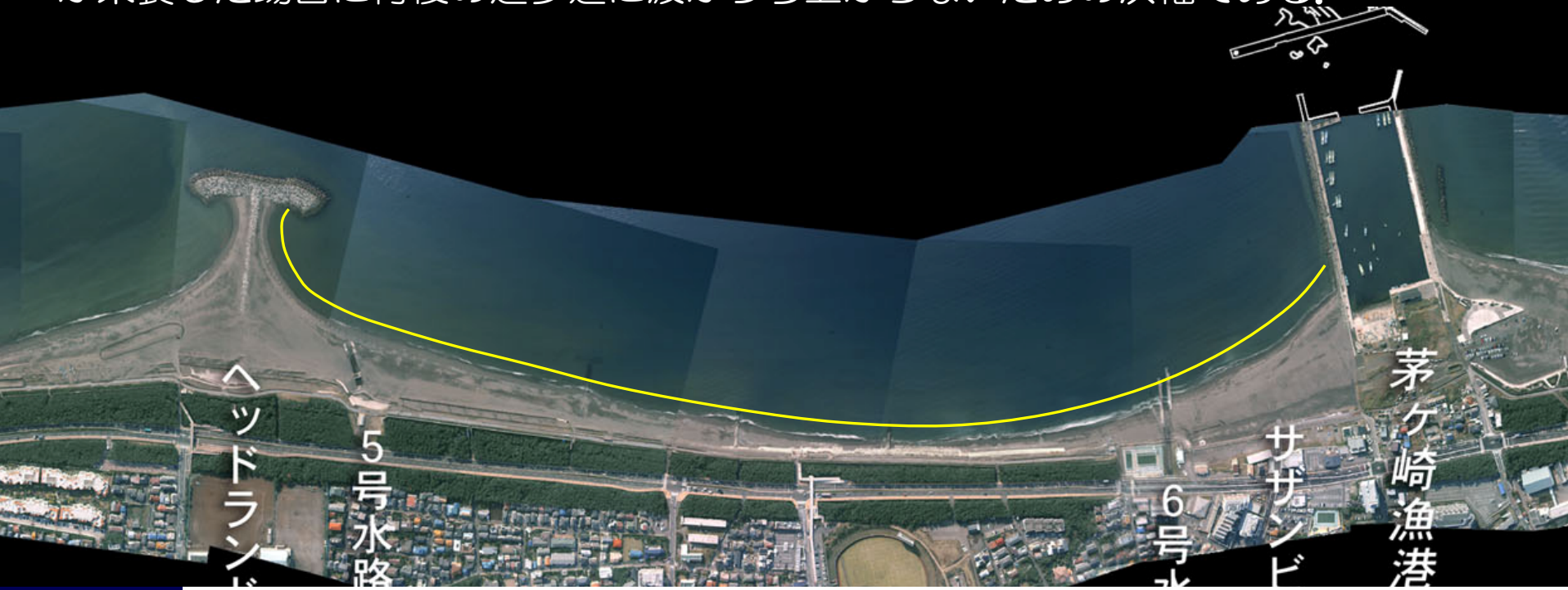
2005年10月25日 (No. 18) 投入前

汀線付近を防護する礫も重要だが沖合いの細砂も重要！

2. 養浜諸元

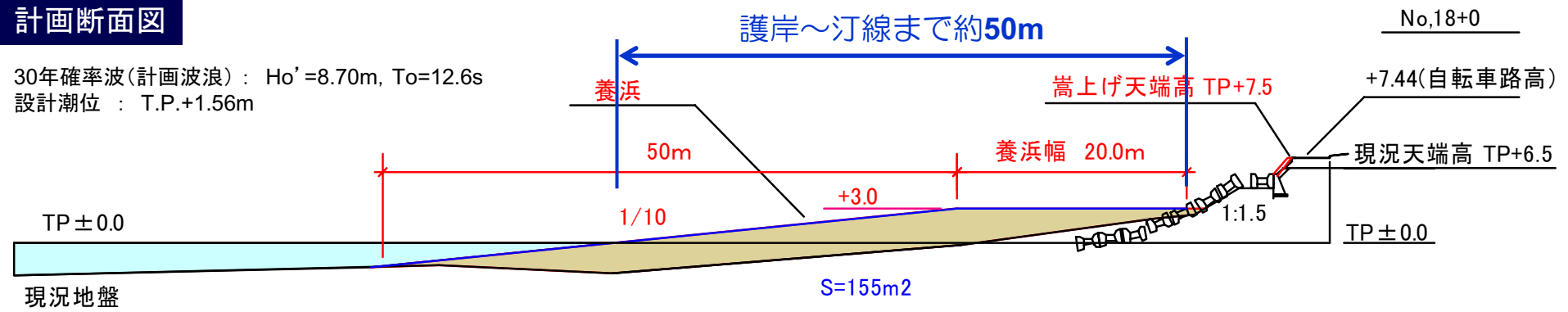
2-1 目標浜幅

まずは防護面より、遊歩道の高さまで護岸を嵩上げすることを前提に、最も後退している箇所（ビーチ中央）の後浜幅を20mとする。これは、高波浪（30年確率）が来襲した場合に背後の遊歩道に波がうち上がらないための浜幅である。



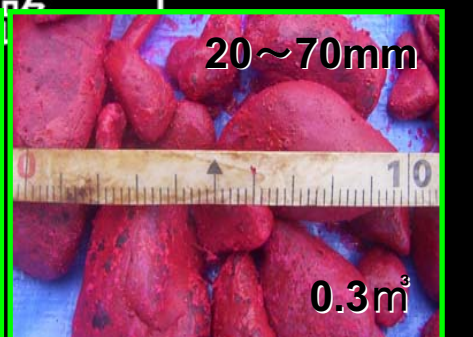
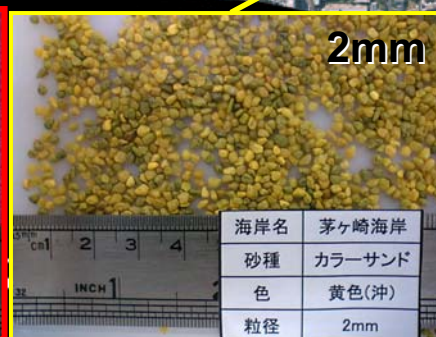
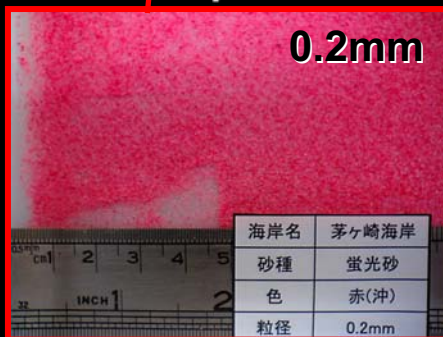
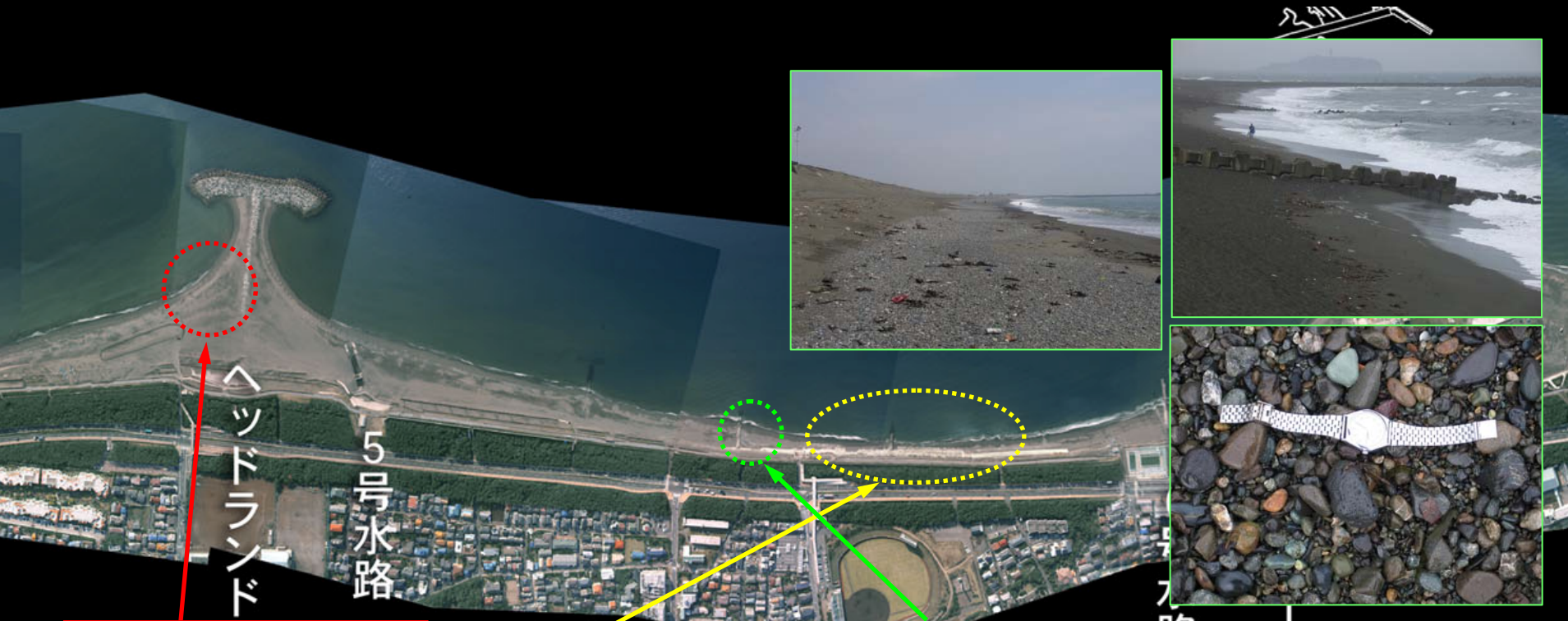
計画断面図

30年確率波(計画波浪) : $H_o' = 8.70\text{m}$, $T_o = 12.6\text{s}$
設計潮位 : T.P.+1.56m



2. 養浜諸元 2-2 粒 径

汀線付近に寄与する2mm以上の礫と沖の海底地形を構成する0.2mm程度の砂を含んだ混合粒径とする。



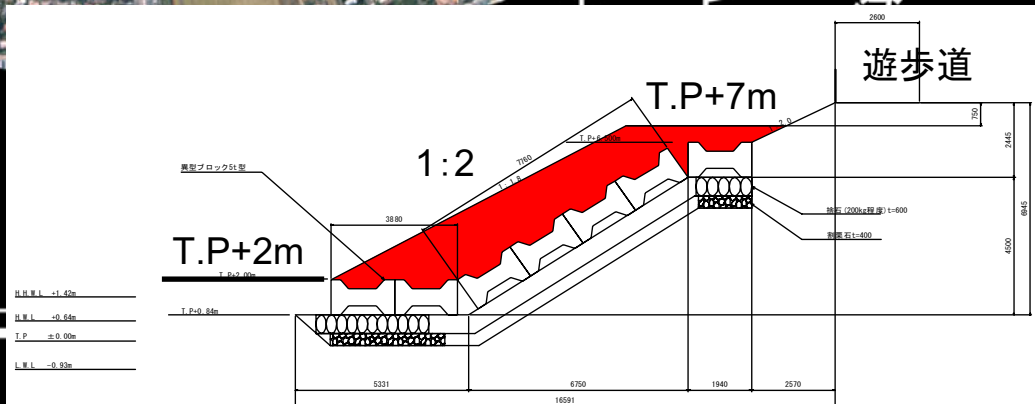
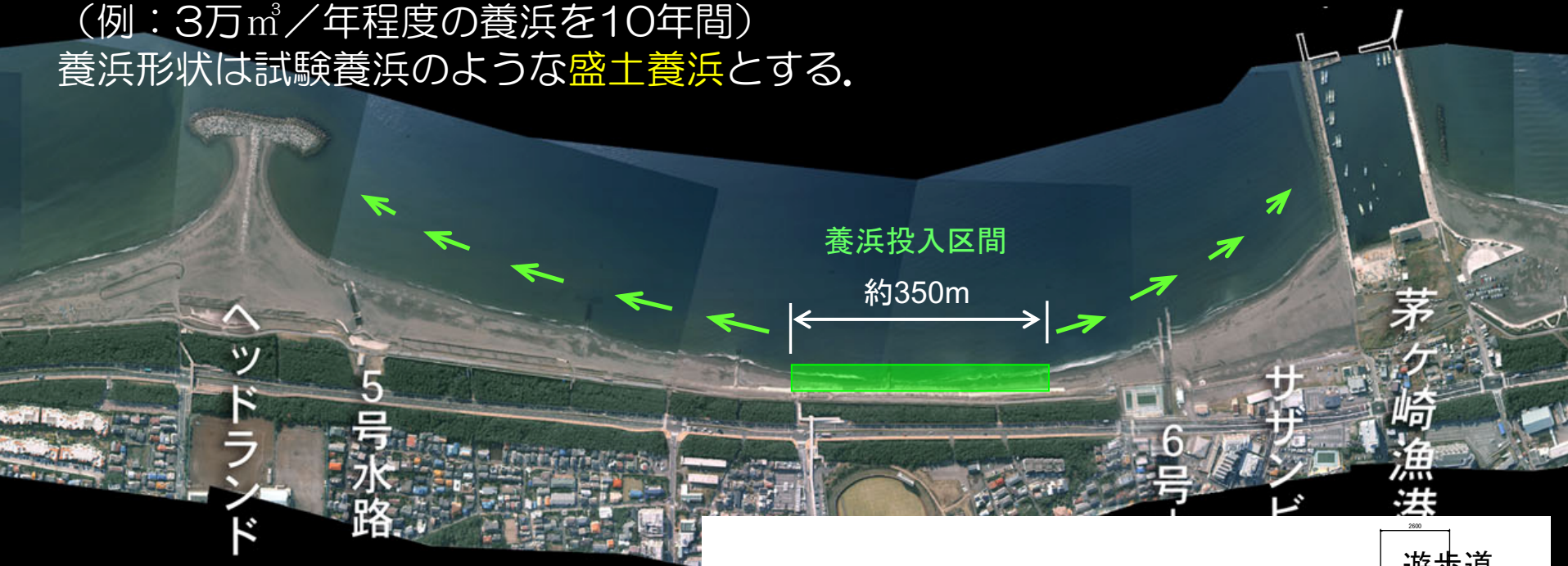
2. 養浜諸元

2-3 養浜方法と養浜形状

全域を養浜するには約30万 m^3 が必要。これを一度に行うための土砂も予算もない。また、多くの量を投入するには長い期間海岸に重機が入るなどの問題が生じる。したがって数年かけて、最も浜幅が狭い中央付近に集中投入し、自然拡散を図る方法とする。なお、投入区間は基本的に立入禁止区域としたい。

(例：3万 m^3 ／年程度の養浜を10年間)

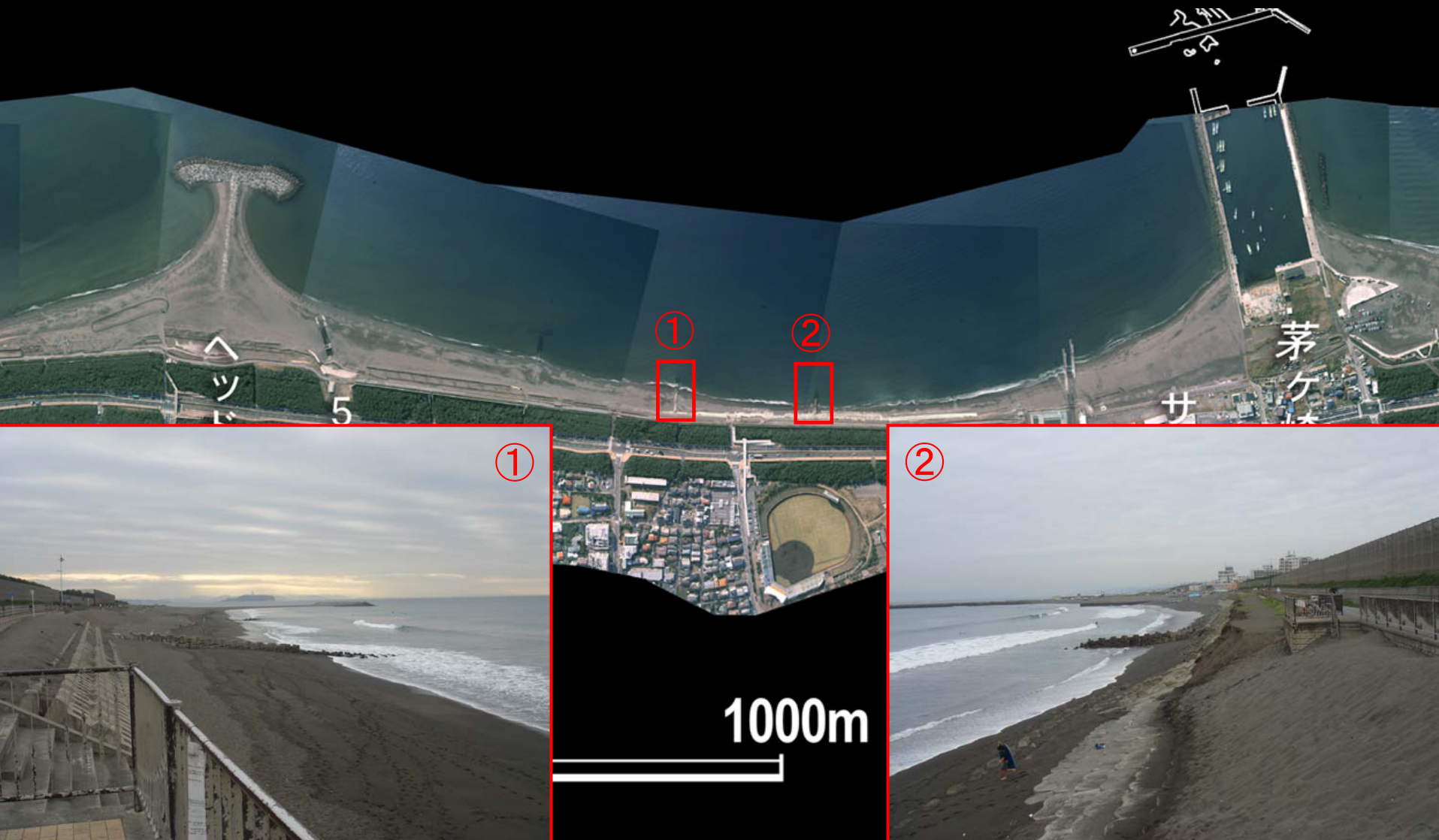
養浜形状は試験養浜のような**盛土養浜**とする。



2. 養浜諸元

2-4 漂砂制御構造物の併用の可能性

今後、詳細を検討した結果、養浜砂の動きを遅くするための漂砂制御構造物の併用も考えられる。例えば既設突堤改良など。



3. 養浜計画のまとめ

目標浜幅	最も後退している箇所（ビーチ中央）の後浜幅を20m
粒径	2mm以上の礫と0.2mm程度の砂を含んだ混合粒径
養浜方法	継続的な局所養浜（3万m ³ 程度/年）
養浜形状	盛土養浜 （延長約350m，高さT.P.+3m，のり勾配1:2）
補助構造物	可能性あり（突堤改良など）